

Bread Givers—来世への逃避

外国語学部 英語英文学科4年 小宅 美香

序論

アメリカは果たして本当に「自由の国」なのだろうか。確かに、白人・アフリカ系・中国系・日系など様々な人種が同じ国内でそれぞれの歴史や文化、宗教を背負つて生きているアメリカは、世界でも有数の多民族国家である。それだけに人々がアメリカに寄せる希望は計り知れず、古くから移民も多い。

しかしながら、表向きは人種差別を嫌つて、るよう見えるアメリカも、個人レベルでは多くの人種差別がある。異人種間の結婚は3%余りで、白人の66%が、自分の親戚や友人が黒人と結ばれることを嫌う。また白人と比べてヒスピニック系アメリカ人の失業率は2倍、黒人系

アメリカ人は2.5倍である（ホンダ 87）。それで止まないのは何故なのだろうか。

アンジア・イージアスカ (Anzia Yezierska, 1885-1970) のBread Givers (1925) におけるスマリンスキ (Smolinsky) 一家の場合も同様だつた。ロシアにおいて、ユダヤ人であるとい

うただそれだけの理由で迫害を受けてきた彼らが助けを求めたのは、アメリカという希望の地だつた。

ユダヤ人たちが次々にアメリカにやつてきたのは、アメリカにおいてはユダヤに対する制度的なあるいは政府による差別が独立当初から基本的になかつたからである（太田 1）。しかし

そのアメリカで彼らを待つていたものは希望で、それが出来る理由はただひとつ、そこがアメリカだからである。自分が何をしようとも味方になつてくれるアメリカ人がいるという安心感があるのだ。自分たちは常にマジヨリティーであり、だから優位に立てる。流れに反して何かを主張することは容易では無い。逆らう者は全て「異端者」のレッテルを貼られるのである。こうして希望を閉ざされた者が辿り着くひとつの宗教、そして神である。実際、アメリカ人の

94%は少なからず神は存在すると信じており（花香 1）、71%の人が自らの信じている神のためなら命を捨てても構わないと思つてている (Land 2)。

ト) れあや Bread Givers は、ラビとして神に祈

りを捧げるだけの毎日を送る父親に悩むサラや母親を通し、男尊女卑のユダヤ人社会に生きる女性の姿が多く考察されてきた。それに加えて本稿では、盲目にユダヤ教を信仰し、いつかは報われると信じて疑わなかつた父親にも焦点を当つた。この父親の言動に見られる異常なまでの宗教心の理由とは一体何なのであろう。結果として何が人を差別へと駆り立てるのだろうか。本来なら、戦争や自爆テロに頼らなくとも、自分を卑下したり、他の誰かに跪いたりしなくても暮らしていけるはずなのだ。何故人は人を傷つけ合つてしか生きられないのだろう。一家

と周囲の人々の生活を見つめ、そこまで人々を夢中にさせる神への信仰心、そして引き起こり続ける差別について考察していきたい。

I アメリカに求めた栄光

A 裁判事件

父親が裁判に掛けられた原因は、一家の家賃を女主人が取り立てに来たことにある。未納の家賃のことを気に掛けもせず熱心にトーラー研究に勤しむ父親の姿が、女主人の怒りを買った

のだ。腹を立てた彼女は父親のトーラーを取り返して床に投げつけたのだが、今度は逆にそのことが父親の逆鱗に触れ、彼は彼女の頬を打つたのだった。

And Mother was telling him how the butcher and baker and Zalmon the fish-peddler left their work to bail him out. And how they raised the money together for the best American-born lawyer to take his part. (BG 24)

「ユダヤ人」が嫌われた理由とは何だろうか。スマリンスキ一家が逃げ出して来たロシアで

は無く、ただ相手の姿が摩り替わつただけの同じ結末だつたのだ。一家の末娘であるサラ・スマリンスキ (Sarah Smolinsky) は、仕事に就くことが出来なかつたり、彼女の父親であるレブ・スマリンスキ (Reb Smolinsky) に至つては、設備の不完全な店舗を騙し売られた

りした。双方ともその理由は「ユダヤ人であるから」である。

このように、希望に胸を膨らませる彼らに対してアメリカは無常にも排他的であった。ロシアでの迫害者が皇帝 “Tsar of Russia.” (BG 33) 1 であったのなら、その後継者はアメリカ国民と言える。アメリカ人たちは固まつて集団を作り、自分たちの中で言われていることやされていることを、あたかもそれが常識であると言わんばかりに強要するのである。

それが出来る理由はただひとつ、そこがアメリカだからである。自分が何をしようとも味方になつてくれるアメリカ人がいるという安心感があるのだ。自分たちは常にマジヨリティーであり、だから優位に立てる。流れに反して何かを主張することは容易では無い。逆らう者は全て「異端者」のレッテルを貼られるのである。こうして希望を閉ざされた者が辿り着くひとつの宗教、そして神である。実際、アメリカ人の

ど法廷には居ない。アメリカ人が法廷を取り仕切つていたと言う事実は、起訴事実を述べられた上でもなお堂々と "It's a lie!" (BG 25) と叫ぶ。との出来る女主人の態度に伺える。また、彼女の贅沢な服装や傲慢な態度も、ユダヤ人たちにとっては許し難いものだったに違いない。

B 欠陥店舗

父親が騙し売られた店舗からも、標的がユダヤ人であったことを証明する事実が見て取れる。先ず何よりその物件の記事が、"Ghetto News" (BG 112) のものであつたらしい。しかもその記事は、must have cash to-day. (BG 112) & Only the man with ready cash need come. (BG 112) など、明らかに疑わしい文章で構成されていた。

トトの記事に疑惑を持ったのは女たちである。そのため妻は、物件を見に行くという夫に向かい、自分も行くまでは契約をしないように念を押した。男尊女卑のユダヤ人社会において、妻がこの時ほど夫である彼に自分の意見を主張したことは無かつたであろう。しかし彼女の主張も虚しく、父親は見事に不当な物件の契約を果たしたのだった。

トトの差は一体何なのか。『今まで無く「世

間を知つてゐるか否か』の差であろう。働くことによって社会の実情を知つてゐる女たちは、世間の自分たちユダヤ人にに対する目を充分に理解していた。しかしながらラビであることを理由に働く、仕事を妻と娘たちに任せきりにしと知らない。

そのことに加え彼の信仰するユダヤ教は、人を騙していけないことを教えとしており、彼は忠実にそれを守る。この教えこそが、アメリカ人がユダヤ人を狙う最大の理由だったのだ。父親は、これほどにも清い存在である自分がまさか他人に騙されるなどとは夢にも思わないのである。実際、詐欺に遭つたことに気がつき怒り狂う母親とは全く対照的に彼は落ち着き払つていた。

父親を狙い、騙した男たちは言うまでも無く犯人である。しかし父親に落ち度が無かつたかと言えば必ずしもそうでは無い。きちんと確認されすれば必ずしもそうでは無い。きちんと確認されすれば、他人の言葉を鵜呑みにする父親のようなユダヤ人ほど、騙しやすい者は他に居ないだろう。このように、アメリカと云うビジネスの国で暮らしていくには父親は余りにも無知で世間知らず過ぎでいたといふ。そりでは父親の思いや

ユダヤ教は一切通用せず、ますます「排他的なアメリカ」のイメージが助長されていくのだった。

C 貸貸物件

トーラー研究に没頭する父親を嫌い強引に家出したサラは、つまりはユダヤ人であることを捨てたと言つても過言ではない。自分がユダヤ人であることを確認するためにサラが出来たこと、それは自らのユダヤ性の否定に他ならない (トト 3)。しかしながら今回もまた待ち受けたものは差別であった。"room-to-let" (BG 157) のサインはあるにも関わらず、こそ訪ねる "I don't take girls" (BG 157)、"No girls" (BG 157) と書かれた理由で断られた。その中で最も注目すべきは、やつとのトトセアラに部屋を貸すと云ふを承諾してくれた女家主の台詞である。

I already had an experience with one like you. She took out books from the library. And in the middle of the night, I could see by the crack in the door that she was burning away my gas, reading. (BG 159)

II アメリカが恐れたもの

トトの考え方こそが差別を助長させてしまう大きな原因の一つであろう。過去に嫌な経験があるからと言ふ、その後に出会う人を "Like you" と一括りにあらめてしまう。セアラが "Look only on me!" (BG 159) と抵抗していくように、全く以つてその人個人を見ようとはしないのだ。まさに「否定的ステレオタイプ」 (Nishida 1) である。いとたんステレオタイプを知識として持つと、人間はそれを変容させしむるより持続するため、解消され難いのだ (Nishida 2)。

例え同じ人物でも、「ユダヤ人」というレッテルがあるだけで、差別の対象となるのだ。上つ面だけで人を判断している証拠である。人の感情とは余りに極端で、本人に都合のいいようになっている。長い物には巻かれ、という主義で (西森 1)、「ユダヤ人=差別する相手」という概念が、頭の中出来上がつてしまつた。こうした否定的ステレオタイプによって歪曲されながら下された結果、差別が生起する (Nishida 1)。

トトのやうに、多くの人がその思いを寄せた希望の国・アメリカの実態は、余りにも悲惨で脆

いものだった。WASP (White Anglo Saxon Protestant) 以外を認めようとはしなかつたアメリカは、ユダヤ人を始め他民族によって構成

されつゝある自国を、差別という卑劣な方法で乗り切らうとしたのだ、自己の優位を脅かされまいとする彼らは、やがてやがてしか母国、そして自分自身を守るトトが出来なかつたのである。

III アメリカが恐れたもの

トトのやうに、「アメリカでは、アメリカでは」と強調するトトより、長女ベッシー・スマリノスキー (Bessie Smolinsky) の恋人でアメリカ人のバエル・バーン・ステイン (Berele Bernstein) は、父親のユダヤ人的な考え方を否定し、アメリカナイズさせようとしている。ユダヤ教信者でしかもラビである父親にとって、トーラー信仰を止めなどと言つうことは、容易に受け入れられる要求であるはずがない。それでも関わらず、「もしそれが嫌だと言うのならサヨナラだ!」といふバエルの考え方は、自己中心的な行動以外の何物でもない。

確かに、「娘が嫁に行つて居なくなつてしまつたら自分が生活出来なくなるから、それだけの手当てを代わりによこせ」という父親の要求は「普通」では無い。しかしながらそうだからそれと同時に、アメリカ的な考え方を非アメリカ人に対して押し付けようとする行動も見られる。

In America they got no use for Torah learning. In America everybody got to earn his living first. You got two hands and two feet. Why don't you go to work? (BG 49)

それが「普通」であるかも知れないが、父親にしてみれば「自分の生活費を娘たちが稼ぐ」のが「普通」なのである。

つまり、人はみな「自分のしている」と=普通、当たり前」という感覚を持つており、「それにそぐわない」と=普通ではない、異常である」という錯覚に陥ってしまうのである。そのためバレルは、極めつけと言わんばかりに、ベッシーに以下のように論じてゐる。

"This is America," Berel Bernstein went on, "where everybody got to look out for themselves." (BG 49)

「これがアメリカなんだ」という押し付けは、相手の感情を逆撫でる意味以外のものを持たないだろう。その証拠に、この言葉を聞いたベッシーは、バレルとの別れを決意している。それだけではない。父親の裁判を引き起した女主人公にも相手の気持ちを無視した台詞が見られる。

"Hear him only! The dirty do-nothing! Go to work yourself! Stop singing prayers Then you'll have money for rent!" (BG 18)

汚い言葉で父親を罵る女主人公にとつては、確かに神への祈りなど、働くことと比べたら比べるには値しない行為であろう。しかし父親にとつてはそうではないのである。トニーにもふたりの間には大きな錯覚が生じ、そのせいでLAにおいて考察した裁判が起つてしまつたと言える。

それにも関わらず、何故彼らはここまでアメリカナイズを強要することが出来たのか。その答えは序論においても述べたように、そこがアメリカだからである。広大な土地を持ち、世界の中心として成り上がつたアメリカという国自体とその国民が、バレルや女主人の味方なのだ。

ユダヤ人とは所詮アメリカにおいてはdirty immigrants (BG 17) であり、地位も権力も無い。そのような彼らが自分たちに歓迎されるはずが無いという搖るぎ無い自信が、アメリカ人の中にはあつた。故に差別の対象はマイノリティである。つまり裏を返せば、マジョリティである差別者は、群れなければ何も出来ない者の集まりだと見える。一見優位に立つているように見えるアメリカ人ではあるが、本当は誰より脆くて弱い立場なのであらう。

価値観は人それぞれ違う。肌の色や言語がない。

III 現実逃避

LAにおいて、ユダヤ人たちがアメリカで慎ましい生活を送らなければならない一因として、アメリカ人の排他的な性格がある」と見か。

LAにおいて、ユダヤ人たちがアメリカで慎ましい生活を送らなければならない一因として、アメリカ人の排他的な性格がある」と見か。

てきた。しかしそのような日々生きしていくこともままならない生活に対し、父親と娘たちの考え方は明らかに相反している。

次女マーシャ・スマリーンスキー (Mashah Smolinsky) は、汚い格好で居るのを嫌がり、稼いだ金をドレスやアクセサリーに注ぎ込んで、質素な生活に潤いを求めるようとしてゐる。サラは、苦しい経済状況の中でそのように稼いだ金を好き勝手に使う姉を軽蔑しながらも、同時に羨ましく思つてゐる。それでもやはり貧乏でいることをこの上なく嫌つており、いつか必ず「アメリカ人」になって裕福に暮らすことを心に誓う。このように一刻も早く貧困生活から抜け出したいと願う娘たちをなだめるかのように、父親は以下のように論すのだった。

In 1880 Dostoyevsky wrote in The Brothers Karamazov that^z If God does not exist, then everything is permissible... (Land 2)

宗教とは、辛い世の中で生きるための全てであり、自分を保つものなのである。その証拠として、神の存在意義は以下のように述べられてゐる。

まさに「の通りであり、これは裏を返せば「神が存在している」といふことにより、世の中の秩序が保たれている」とこつゝことではないだろうか。まだ若く、アメリカへの希望を捨てきる」との出来ない娘たちと違い、彼はもう既になす術の無いことを無意識のうちに悟つてしまつてゐるのだ。この辛い生活も、神が自分に与えてくれた試練であると思えば耐えられないことは無い。

い。理不尽な状況下において、怒りを吸収し鎮めてくれる神を呼ぶ」とやつと自分を保つことが出来るのだ。

神とは何と都合のいい存在なのであらうか。辛い時にはその怒りをぶつけ神の存在を肯定するが、同時に否定することも可能である。例えばサラは、泣くする」とも出来ない母親の死を「神様なんて居なかつたんだ」と自分に言い聞か

てゐる。つまり父親にとつては、確かに神への祈りなど、働くことと比べたら比べるには値しない行為であろう。しかし父親にとつてはそうではないのである。トニーにもふたりの間には大きな錯覚が生じ、そのせいでLAにおいて考察した裁判が起つてしまつたと言える。

「トニーはアメリカなのだから、アメリカに従え！」ではなくて、互いに互いを尊重して歩み寄る」とが必要なのだ。「自分が普通」という錯覚を捨て、「相手が普通」と思えるくらいの心の余裕を持つて接する」とで、今まで見えてこなかつた部分が見えてくるのではないか。

安らぎを与えてくれる「心のパノ」が必要なのだ。

父親にとつてはトーラー信仰である「心のパノ」は、サラにとつてはアメリカナイズされるにあり、マーシャにとつてはお洒落をするにあり、と、人それぞれ違つた

「生きがい」があり、それに頼つて生きている。だから他人に文句を言う権利も無いし、誰が正しい訳でも間違つてゐる訳でもない。ひとりひとり違うといふのが「当たり前」なのである。

それにも関わらず、ひとつの人種、ひとつの言語、ひとつの宗教に一本化しようとする」とが間違いなのだ。それそれが自己を主張し続けているは、差別や迫害、そして戦争が起つてしまふのもむづむづであらう。自分だけが正しいとは思つてはいけない、そうかと言つて自分だけが妥協してくると卑屈になつてもいけない。

1951年、サンフランシスコ講和会議において、敗戦国である日本の処理がなされた時、フィリピンのロムロ代表は、以下のよつと述べた。

あなたがたが我々に与えた傷は、どんな黄金の世の中のをもつてしやも、元に戻せる

ものではない。しかし、運命は我々を隣人にした。我々は共に平和に生きるほかはない。そのためには我々が許しと友情の手を差し伸べる前に、日本には心からの悔恨と生まれ変わることを示して欲しい。(『吉田茂』2)

ソビエト連邦や東欧諸国など、日本の復帰を認めようしない国もあつた中、日本に最も擁取されたであろう国の一つであるフィリピンの代表が、日本に救いの手を差し伸べた瞬間であつた。この言葉によつて現在の日本は生かされている。

世界は犠牲の上に成り立つ。過去を全て許し、今すぐリセットをすることは不可能かもしれないが、過去に囚われたまま少しでも歩み寄ることをしなければ、世界平和が訪れるることは永遠に無いであろう。サラがアメリカに拒否された当時のまま、アメリカは、そして世界はまた同じ過ちを繰り返すのか。

ひとりひとりが、もう少しだけ自己主張を抑え相手のことを気遣い、悪いものは悪いと言つ勇気を持つことが出来たのなら、サラは自分がユダヤ人であるところにむつと誇りを持てたはずである。アメリカナイズしようとも思わないで済んだであらうし、父親も心無い差別

に苦しまずには済んだ。今からでも遅くは無い。第一のサラや父親をこれ以上増やさないためにも、わたしたちはただ傍観する」と止め、行動しなければならないのだ。

注

1 Bread GiversのテクストはPersea版を使用。

以下本書はBGと略記し、ページ数によつて記す。邦訳は、全て拙訳。

◆ 参用文献

・花香公寿ABOUT USA 2 Dec.2006

<http://www.kokugai.com/zakki_christ.html>

・ホンダ・R

『アメリカの正体がわかる絵本! The Bold Eagles strikes again』

東京 講談社 2003

・片淵悦久

『Americanerinの幻想—The Bread Giversとアーヴィングの恋—』

ダヤ系女性作家Anzia Yezierskaの恋物語 7 July 2006. <<http://www.let.osaka-u.ac.jp/eibeji/ohr-40-nobuhisakatafuchi.pdf>>

・亀井秀雄

『ナショナリティの問題』 29 May 2006

<http://homepage2.nifty.com/k-seikirei/dojidai/history_2_13.html>

・Land, Richard How religion defines America

29 May 2006

<<http://news.bbc.co.uk/2/hi/programmes/wtwgod/3518221.stm>>

・Nishida, Tomohiro TERMINAL 24 April 2006.

<<http://www2.ocn.ne.jp/~terminal/discrimination.htm>>

・西森マニー

『映画「紳士協定」でみる近代アメリカのユダヤ人差別』 29 May 2006

<<http://www.eigtown.com/index.shtml>>

・太田述正

『米国の人々』 27 June 2006

<<http://www.ohtan.net/color-unm/200409/20040928.html>>

・竹内明彦

『ドベヌ・キヨホ マック ニューベガやぐじ分か』 世界地図 東京 小学館 2004

Yezierska, Anzia. Bread Givers. 1925; New York: Persea Books, Inc., 2003

『吉田茂とオハフ・ハースの平和条約』